

上に存在するinv遺伝子を増幅するもので、これら3種のプライマーを同時に使用することで、病原性のY.e.とY.p.を一度に検出することが可能である。

菌分離の結果では、81頭中4頭、4.9%から計13株のエルシニアが分離され、これらは何れもY.e.で、血清学的にはいわゆる病原性のO:3、5、8、9以外で、市販の診断用抗血清に反応しないものであった。また、増菌培養した段階で3種のプライマーによるPCRを試みたが、陽性株は全く検出されなかった。

尚、本研究は他の各種野生動物糞便からのエルシニアの分離の一環として行っており、本PCR法が病原性エルシニアの早期検出法として利用することは確認済みである。

以上の成績から、岐阜県の野生ニホンザルの間には病原性エルシニアは分布していないものと考えられる。この成績は、ニホンザルを主とする飼育サル497頭中5頭(1%)からY.e.、2頭(0.4%)からY.p.が分離され、しかもその何れも病原性エルシニアでなかったことと類似した成績である。

資料：4

霊長類のアレルギー性メデイエーターの感受性について

永井博式・稲垣直樹・竹田博史
(岐阜薬大・薬理)

Substance P(SP)はアミノ酸11個からなるペプチドホルモンである。最初、消化管および脳の酸、エタノール抽出物中にアトロピン存在下で、強い血圧降下作用と共に腸管収縮作用を示す物質として見いだされた。その後、免疫、アレルギーおよび炎症との関連が注目され、現在では神経原性炎症の最も重要な物質の一つと考えられている。化学構造はC末端のアミノ酸配列がPhe-Phe-Gly-Leu-Met-NH₂であり、ニューロキニンAおよびニューロキニンBと類似し、これら3種の物質を総称してタキキニンと呼んでいる。

本年度はサルの鼻アレルギー反応におけるSPの役割について検討した。

すなわち、外来性にSPをあたえる肥満細胞や好中球からは種々のメデイエーターが遊離する。ヒトでは皮膚肥満細胞からヒスタミンを遊離する。

しかし、肺肥満細胞や好塩基球からはヒスタミンを遊離しない。ニホンザルでは、ヒトと同様なことが観察されたのに加えて、眼粘膜および鼻粘膜肥満細胞からも軽度なヒスタミン遊離が引き起こされた。これらの成績はアレルギー性皮膚炎や鼻炎あるいは結膜炎においてSPの関与を示唆するものと思われた。

資料：7

犬歯部を中心にみた霊長類の歯列の形態学的研究
—ニホンザルについて—

岩田秀夫、岡本全宏、小田嶋敏夫
(佐藤歯学研究所)

ヒトの乳歯列には多くの空隙が存在している。特に上顎B-C、下顎C-Dの歯間部に見られる大きな空隙を、ヒト以外の霊長類の歯列にも同様に認められることから、霊長空隙と呼ばれている。その由来と成因について解明するために霊長類(ニホンザル)の歯列を犬歯部を中心に調査した。

資料は京都大学霊長類研究所所蔵の頭蓋骨で年齢及び性別の明らかなニホンザル(乳歯列期雌雄各5例、永久歯列期雌雄各10例、計30例)を用いた。その他の霊長類については比較対象とした。

歯列弓形態については、犬歯の大きさによって雄の永久歯列では犬歯が歯列弓の外方に大きく突出しているが、雌雄の乳歯列と雌の永久歯列では犬歯が小さく、ほぼ歯列の中に納まっている。

歯列弓幅径については、乳歯列においては雌雄の差は少ないが、永久歯列になると雄が約2.50mm雌より大きい。歯列弓長径については、乳歯列においては雌雄の差は少ないが、永久歯列になると雄が約8.00mm雌より大きい。

歯間空隙については、乳歯列と永久歯列に共通して上下顎ともi2-c間(I2-C間)に最も大きな空隙が存在する。乳歯列では上顎i1-i2間、i2-c間に空隙が観察されi1-i2間では発現率20%、平均値0.09mmと小さい。i2-c間では発現率80%、平均値2.32mmであった。空隙の全く無い完全閉鎖型が雌雄各1例観察された。下顎では上顎に比べて多くの部位に空隙が認められた。i2-c間は発現率80%、平均値1.55mmでc-m1間は60%、0.42mmであった。永久歯列では上下顎ともI2-C間、C-P3